

---

# FAIRY TAIL - ANOTHER STORY DECADE -

月龍

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

FAIRY TAIL - ANOTHER STORY DE  
CADE -

### 【Nコード】

N2068N

### 【作者名】

月龍

### 【あらすじ】

世界の破壊者     ディケイド……

それがもし、ライダーの存在しない世界に生まれてしまっていたら。

この地、魔法の世界でもう一つの物語が動き出す。

(前書き)

皆さん、こんにちは。

月龍と申します。

フェアリーテイルと仮面ライダーディケイドの創作小説です。  
不明な点、誤字・脱字などありましたら、気軽に指摘ください。  
感想もお寄せいただければ嬉しいです。

以後、よろしく願います。

青空が広がる街。そこには多くに人で賑わっていた。仕事、買い物、遊び等様々な形で人々の笑顔が広がっている。

その街を一望できる高台で、とある男が首に下げているカメラのシャッターを切った。そして側面についているダイヤルを回して再びシャッターを切る。

その作業をカメラの向きを変えて幾度か繰り返すと、ポケットから水晶を取り出してカメラに翳した。すると、水晶は輝き男の前に数枚の写真が現れた。

しかし写っているのは全てピンぼけしている物ばかりであった。それを一枚ずつ確認しながら、男は溜息をついた。

「やはりここは、俺の世界じゃない……か」

どこか落ち込んだような台詞ではあるが、本人の表情は反していない。既に分かりきったような、さもつまらなさそうな感じである。

男はポケットに写真と水晶を仕舞うと、下げているカメラを操作する。キリキリとダイヤルを回しながら、レンズを覗いているとその中に人が写った。

顔を上げて見ると、大柄の男が立っており、更には後ろに数人を引き連れており、眉間にしわを寄せ、パキパキと手を鳴らし不機嫌を表している。

「見つけたぞ、このエセカメラ野郎！」

「で、何の用だ？ 今日営業は終わっている。撮って欲しいなら倍額を請求するぞ……っ」と

言いながら男はシャッターを切り、また水晶を取り出して写真を出現させる。それを手に取って相手の顔に貼り付けた。

「サービスだ。持っていけ……」

「ふっ……ふざけるなっ！」

貼り付けられた写真を剥がして、それを握り潰した拳で殴ろうとするが、男は軽い動作で拳をかわして、潰された写真を取り返し、広げながら首をかしげた。

「よく撮れてるじゃないか。さすが、俺だな」

「何言つてやがる！ ピンぼけしてんじゃねーかよっ！ それも全部！」

大柄の男が叫ぶと引き連れていた連中がそれぞれの手に写真を持った。それは言っていた通り全てがピンぼけしており、誰が写ったか、ましてどこを写したのかさえ分からないものとなっていた。

「お前言ったよな？ 『お前の全てを撮ってやる』ってよ？ こんなふざけた写真くれやがつて、ただで済むと思つてんのか？」

「だから……上手く撮れてるだろ？ お前の醜い顔が……っ」と

再度振るわれた拳を回避すると、男は高台から飛び降りた。片手をついて着地し立ち上がると、そのまま高台に背を向けて街の方へと歩きだした。

「おい、テメエ！ 待てや、コラッ！」

大柄の男が身を乗り出して叫んでいるが、それに対し振り返る事

も無く、右腕を上げて人差し指だけを突き出し振るい、返事を返した。

「にしても、相変わらずだな……この世界は」

高台から見えた街の風景を思い返して呟いた。別に不満があると言いつ訳ではない。

賑わいのある街、笑顔の人々の姿は世界が平和であると言いつ事は意味していると思える。勿論、何の問題を抱えていないと言いつ訳ではない。それが男の呟いた理由である。

「ぶっ壊されてるのに、嫌な顔一つしないで直すのはな……ま、多分あの“ギルド”だろうが……」

高台の近くにある、“崩壊している教会”を前にしてカメラのシャッターを切る。

ただ壊れているだけではなく、放火の跡も見られると言う悲惨な状態だ。それを一から建て直しているらしく、実にご苦労な事だろう。

もう一度シャッターを切ろうと指を掛けたその時、ファインダーに暗色のようなものが写った。

「何だ？」

不思議に思い顔を上げたが、そこには先ほど同様の教会があるだけだ。疑問に思いながらも見間違いと判断し、今度は撮った物を現像しようと水晶を取り出して使用するが、それは何の反応も示さなかった。それが信じられなかったのか、何度も水晶を握るが同じ事であった。

「マジか……」

溜息をついて逆の側のポケットから財布を取り出した。そう、この水晶は無限に写真を現像させるわけではなく、一定枚数しか出来ない。そして再度使うには新しく買う等の必要があるのだ。

だが、財布事情を確認した男は再度溜息をついた。

2

この世界は、一風変わった文化が根付いている

その名も『魔法』。人々はそれを生活の一つとして使用し、または生業としている人々も存在している。しかし、この世界の人間全てが魔法を使えると言う訳ではない。男の持っている水晶がいい例だろう。これは通称、魔水晶マクリマと呼ばれ、魔法を使うのに必要な魔力を結晶化させ、魔法を使えるようにしたものである。

それは普通に売買されており、魔法中心の都市ならば買う事が出来る。そしてその場所に男は訪れていた。

6

「金は何とかする。いつも通りで頼む」

「いつもどうも現像魔水晶一つね……って、言うと思ったか!？」

「あでーっ! まっ、待て……鼻っ……鼻がー!？」

その店の主である女性に鼻を捻られ、数秒の後千切る勢いで引っ張られ絶叫が響く。実際には千切れては無いが、赤くなってしまっているところから相当な力で引っ張られたのだと言うのが想像できる。

男は涙目になりながら、鼻を抑えて相手を睨みつけた。

「鼻が千切れるだろ……何つーバカ力だ」

「だったら金払いなさいよ! ツカサ、アンタどれくらいウチに借

金してるか分かってる？」

「売れない商品の在庫整理してやってんだ、お相子だろ」

「まともに写真撮れてから言え！」

女性がカウンターを強く叩きながら怒鳴った。ツカサと言われた男は、ポケットから先ほどまで撮っていた写真を相手に渡した。それを受け取り、一枚ずつ見ているがその表情が晴れるような事は無く、むしろ逆に眉間にしわを寄せている。

だがこれも、先ほどのツカサと同様に溜息をついた。そう、ピンぼけしている写真は彼女も既に知っている事だからだ。

「相変わらずか。一体どう撮ればこんな写真になるのよ？」

「どう撮っても一緒だ。この世界が俺を拒絶している……全てが俺から逃げているからな」

「何年も生活してるのに？」

「お前な……」

ツカサは言い返そうと身を乗り出したが、来店を告げるベルが鳴った事により口を閉ざした。靴音が聞こえたので、そちらの方を向くと金髪を左側だけ結んだ少女が立っていた。

少女は何かを探すように歩いているが、徐々にこちらに近づいて来てるのでツカサはすかさずカメラを構えたが、それを店長に腕を捻られ止められた。

「いらつしゃい、何か欲しい物でも？」

「あ、はい。ええっと……」

「日用品なら他所のが良いぞ。何せここの店長はゴリラだからつてえ！？」

締める態勢のままだったせいか、更に捻られてツカサは悲鳴を上



げる。その様子を見た少女はかなりたじろいでいる様子だが、営業スマイルを使っている店長に顔を向けて話を続けた。

「門ゲートの鍵を。それも強力な！」

「門……成る程な、大体分かった。ところで一枚」

いつの間にか抜け出していたツカサは少女に向けてカメラのシャッターを切った。一瞬の出来事に呆気に取られたようだ。だがツカサはそんなのお構いなしに、商品として陳列してある水晶を取って写真を現像させた。

「ほら、サービスだ。ちなみに、この店の強力な門の鍵は南十字座のクルックス。戦闘には不向きだが、持っていて損は無いだろ。じゃあな、店長」

「あ、コラ待て、ツカサ！」

しかしツカサは静止の言葉を聞かず、人差し指を突き出して腕を振るって返事を返した。店内の扉が閉まると、未だに呆気にとられている少女とつかれた様子の女性の店主が残される。お互いに思わず溜息が出た。

「何なんですか？ 今の人？」

「ああ、彼？ 名前はツカサ。一年前、この街にふらつと現れて居付いちちゃったの。写真を撮るのが好きみたいでね、ウチの現像魔水晶のお特異様。代金を貰った事はほとんど無いけど」

「大変ですね……そう言えば、写真……うげっ」

少女はツカサから受け取った写真を見てかなり驚いた顔をした。その理由を察した店主は、少女の顔を見て吹き出しそうになったが、それを堪えて彼女が探していると言う門の鍵を集めた箱を取り出し

ながら言った。

「写真と言っても、センス無いんだけどね」

「センスって言うか、これは……いくらなんでも酷すぎよーっ！  
！」

正面から撮っているが、顔の頬の部分がブレてしまい、細身の少女がその真逆になった写真が出来上がってしまった。

3

ツカサは再び街に駆け出してカメラのシャッターを切っていた。しかし、途中で疲れたのか公園へと入り空いているベンチに腰を下ろした。周りを見渡すと、噴水や花畑、砂場などに人の姿が見受けられる。それをまたカメラに収めようと構えると、またもや遮るように人が写った。

9

「これってどういう事！」

「何がだ？」

「アンタがさつき撮った写真よ！ 何コレ？ ちゃんと撮りなさいよね」

立っていたのは先ほどの魔法販売店で出会った少女だ。その手には先ほど撮った写真が握られており、それについての文句を言いに来たのだろう。ツカサにとってはもう慣れてしまった事なので、もう動作も無い様子で相手に告げた。

「ちゃんと撮ったさ。ただお前が、俺に相応しく無いだけだ」

「何よそれ！ 自分が上手く取れなかったのを人のせいにする気！  
？」

「俺は世界の全てを写したいと思っている。だが、世界が俺に撮られたがっついていない。だからさ……」

「どういう意味？」

「ここは俺の世界じゃないって事だ」

ツカサは少女に向けてカメラを構えたが、ファインダーにはまた暗色の何かが写った。それに今度は緑色の複眼を持ったマゼンダ色の何かと、黒いコートを羽織った男性が一緒に写っていた。

ツカサは思わず動きが止まってしまいが、視線を上げると少女が顔を覗き込んで来ていたので大きく仰け反った。

「なっ……何だよ、お前。ビックリさせんなよ……」

「アンタが急に固まっちゃうから心配してやったのに、失礼しちゃうわ」

「第一、一体何のようだ？ 写真のクレームなら受け付けんど、サービスなんだからな」

「クレームはさっき言ったじゃない……ってか、そうそう。さっきのお店の店長さんからの伝言『ちゃんと金払え』って。ダメじゃない、お店の商品勝手に持って行っちゃ」

「笑ってたろ、あの店長。いいんだよ、月末には払ってるからな」

ベンチから立ち上がり、気を取り直してシャッターを切っていく。その後ろをゆつくりと少女が着いて来るが、ツカサは一切気にしなかった。ただただ一定の動作を繰り返していくだけである。

「ねえ、俺の世界じゃない、ってどういう事？」

「ああ、それが。つまり……俺に写される資格のある世界ってことだ」

「それがここじゃないって事？ じゃあ、あなたの世界って？」

「さあな。悪いが、そんな事はどうでもいい。俺はただ、世界を写

せればそれでいい」

少女へと振り返りシャッターを切った。だが、その表情は先ほどの様子とは変わっていた。

「とうかしたか？」

「あ……ううん。何でもないの。そう言えば、まだ名前を」

「興味ない。と言うか、俺にあまり関わるな。面倒な事になる前にな」

「ちょっと待ってよ」

そう言っ、ツカサは少女の前を去って行こうとするが、腕をいきなり捕まれて静止する。その相手は当然少女で、まだ何か用があるのかと言う視線を送る。

「ちょっと付き合ってよ、食事くらいいいでしょ？」

「面倒だな。付き合っ」

られない、と続けようとしたが、それよりも先にツカサの腹の音が鳴ってしまう。対する少女はそれを聞いて勝ち誇った顔をしており、突き放そうにも説得力が無いと判断し、渋々その提案に乗る事にした。

4

ルーシイは今、カメラを首に下げた男と一緒にレストランへ来ていた。男は連れて来られた事に不満があるらしく、ふてくされた様子で腕を着いている。

彼の名前はツカサと言うらしく、先ほど魔法専門ショップで出会ったばかりであるが、そんな彼を食事へ誘ったのは理由がある。し

かし、それは口が裂けても言えない。

(この人のツケで鍵をまけて貰った何て言えるわけないわ……)

ルーシイが買い物をした店の店長とツカサは仲が良いらしく、彼が撮った写真の慰謝料として、ルーシイが購入した物の値段を下げてもらったのだ。しかし、それでは申し訳ないと思い、少し強引な接触を試みてツカサを食事へと誘ったのだ。

「それじゃあ、遠慮しないで頼んで」

「ふざけるな。誰が女に奢ってもらうか……ホットコーヒー」

「ハハハ……そうよね……」

彼もプライドがあるのだろう。しかし、ルーシイはやはり言えない。“2万<sup>ジュエル</sup>”の鍵を半額で買ったとは絶対に。

仕方ないので自分の分と、ホットコーヒーを注文する。

「そう言えばお前……どっかのギルドに入ってるのか？」

「アタシ？ うっん、まだなの。入りたいギルドはあるんだけどね。妖精の尻尾<sup>フェアリーテイル</sup>って言うの」

ツカサからの思わぬ質問であったがルーシイは隠さずに答えた。彼の言ったギルドとはつまり、“魔導師ギルド”の事である。そこは魔導師が集まる組合であり、彼等に仕事や情報を仲介する所である。そしてギルドは世界中に様々存在しており、人気のあるギルドは入るのが難しいと聞いている。

ちなみに、ツカサの質問に答えた事からも分かるだろうが、ルーシイもまた魔導師である。

「フェアリー……ああ、あそこか。お前も物好きだな」

「知ってるんだ。あ、そっか、魔法ショップ寄るんだもんね。もしかして……」

「違う。俺はただのカメラマン……　　っ!？」

話している最中に突然、ツカサは立ち上がった後ろを向いた。何事かと思い、ルーシイも立ち上がった見てみたが、食事を楽しんでいる人や食事を終えて席を立つ人、ウェイターやウエイトレスが居るだけだ。それでも立っているツカサに声を掛けると、彼は何でもないと言って席に座った。

「本当にどうしたの？ さっきもだけど……」

「気のせいだ。多分、俺の見間違えだ」

けれど、神妙な顔付きで答えるために、ルーシイは不自然でならなかったが、食事が運ばれてきたために聞く事は無かった。そしてツカサもそれ以上口を開く事が無かったせいか、この事は自然と流れてしまった。

しかし、そんな2人を見つめる影は確かに存在していた。その瞳には、コーヒーを啜るツカサの姿をじっと見つめていた。

「見つけたわ、世界の破壊者……いえ、“デイケイド”……」

妖しげな笑みを浮かべて、テーブルに置いている大きな水晶を玩具のように転がしていた。

「ちょっとそれアタシのハンバーグ!」

「いいだろ、一切れくらい」

「だったら最初から頼みなさいよ!」

そして店内には騒がしい声が響いていた。

「デイケイド」……貴様はこの世界を破壊する」

街外れの丘からフェルト帽を被った眼鏡の男が呟いた。そうして男が腕を上げて街を潰すように掌を握ると、彼の前に暗色の壁が出現する。そしてその暗色の壁に2つの巨大な影が映る。

「相変わらず、ツカサ相手には容赦ないな。な・る・た・き？」

「君は……」

男が振り返ると、そこには街の魔法専門店の店主である女性が立っていた。彼女は「鳴滝」と呼んだ男に笑みを見せると、ゆっくりと彼に近づいた。

「私の邪魔をするなら、デイケイドではなくお前を排除しても良いんだゾ？」

「わかつているさ……君を相手にはしたくない」

「わかればいい。ツカサは私のものだ。誰にも渡さないゾ」

彼女の言葉を聞いた男は、かなり渋ったような顔を見せながら暗色の壁を出現させて消えた。残された女は変わった形の魔動二輪で街を走っているツカサと金髪の少女の姿を見つけていた。すると、その表情は一変し深く歪んでいた。

5

既に夕暮れとなっていた。食事を終えた後、町中をいろいろと連

れまわされたのち、金髪の少女をホテルの前まで送り届けていた。ツカサ的には面倒な事だったので拒否したのだが、「変な奴に絡まれたくないから」と言う理由で強引に乗ってきたのだ。無視してもよかったのだが、結局は食事を奢ってもらったために言い返す方法を思いつけず乗せる羽目になった。

「はあ……お前一体、何だ」

「別に良いじゃない。可愛い女の子と一日デートできたわけだし」  
「鏡をよく見て言え」

「失礼ね！」

「それじゃあな。俺は行く」

「あつ、待ってよ！ ツカサ！」

少女の呼び止める声を聞きながらも、ツカサはバイクを走らせた。ツカサ自身、これ以上人と関わってはいられないと思っているからだ。

今のツカサはある違和感を感じていた。ファインダーに写ったモノやレストランで感じた視線がその理由だ。そしてそれが、今まで街を転々としていた事とも関係している。

ツカサはすぐさま街を抜けようとバイクの速度を上げる。後少しで街を出るところで、大数の人影が見えた。悪態をつきながらも一端停止する。

「お前等、一体なんだ？」

「貴様だな。“破壊者”と言うのは……」

「何？」

どういふ事だ、と訊ねる隙も無く相手は光球を放った。

ツカサは瞬時にバイクから跳ねてそれを避ける。バイクと避けたツカサの間を抜けた光はその先にある建物へと衝突し破壊する。



「そういう事か。大体わかったぜ……」

喧嘩を売られたのだと判断したツカサは、手に白いバツクルのよ  
うな物を持っていた。そしてそれを腹部に当てようとしたとき、背  
後の方から爆発したような轟音が鳴り響いた。

「なっ……」

爆発したような では無かった。先ほど後にして来たホテルが  
燃えていたのだ。そしてそれはその近くの森林を燃やし大火災にな  
って行く。

一体誰が。そう考えるのと同時にツカサの頭にとある人物が過ぎ  
った。

「アイツ!?!」

あの金髪の少女だ。彼女が魔導師であると言う事は知っているか  
ら、何とかするだろうと考える事も出来る。しかし、嫌な予感がし  
ている。彼女が巻き込まれているという事が、自分と関係している  
としたら……。ツカサは自分の拳を握り締めて目の前に立っている  
相手を睨みつけた。

しかし、相手は“魔法”を使ってきた。それを相手にするには、  
少し手間が掛かる。一刻の猶予も無いであろう状況に、最悪展開の  
ダブルパンチである。

「お困りみたいね?」

「お前……」

急に声をかけられ振り返ると、白装束に身を包み、巨大な魔水晶

を持った女性が立っていた。彼女の名は「ウルティア」。この世界の秩序を取り締まる評議員の一人である。

「何の用だ」

「貴方を捕まえに……当たり前でしょ？ デイケイド……」

「残念だが、俺は捕まる事はやって無いぞ。どっかのバカギルドとは違うからな」

「ええ。だから今日は助けてあげようと思って。急いでるんではない？」

ウルティアはそう言って笑んだが、ツカサは疑いの視線を当然向ける。だが、急いでいる事は確かである。

「……頼むぞ」

「ええ。いつてらっしゃい、破壊者」

ツカサはウルティアを睨みながらバイクへと乗りホテルへと向う。残ったウルティアは目の前に立っている存在に侮蔑の笑みを与えた。

「闇ギルドの端くれね。一体誰のかしら？」

“既に知っていないが”、彼女は口を開いた。言いながら、その目は細くなり手に魔力を集める。僅かの光であるが、それを見た彼等は後ずさりをする。その微かな恐怖心にウルティアは更に笑んだ。

6

ルーシイはかろうじて、炎の渦から逃げていた。突如として発生した火災に混乱しながらも、何とかして外へと走り最悪の事態は免れた。しかし、未だに逃げ切れていない人はいるだろう。そう思い、

手っ取り早く解決する方法としてホテルにある噴水を目指していた。

「きつとアクエリアスなら、なんとかなるわ！」

アクエリアスとは、ルーシイが契約している星霊の事である。横道十二門と呼ばれる希少な鍵から呼び出す事が出来、その力も強力である。

そしてアクエリアスは、宝瓶宮を司っている。つまりは水瓶座の水を操る星霊ならば火災など簡単に解決してくれるはずである。

「あつた。噴水！」

火の少ない所を通ってきたが、何とかホテル中部にある噴水にたどり着いた。腰にかけている鍵を探って噴水の水に突刺そうとした時、突然彼女に炎が襲った。

「きゃあ！ 何っ!?!」

咄嗟に避けて辺りを見渡すが、炎が降って来るような場所ではない。すると、背後に人の気配を感じて振り向いた。炎の中から人のような影が浮かんでくる。

「外した……目的の女……まだ生きてる……」

炎の中に立っていたのは、炎と同じ赤い髪を持った眼帯の男だった。ルーシイは彼を見て驚きを隠せない。炎の中に立っているというのに、まるでそこだけが別空間のようになっていたからだ。それが彼を炎の使い手と言う事は想像できるが、それが何故自分を狙ったかわからなかった。

否、もしかすれば……嫌な仮説が生まれたが、かぶり払って打ち

消した。そんなはずはない、と。

今は現状を対処するのが優先だ。それに、結局は炎相手である。噴水は近くにある。ならば、アドバンテージはこちらが高い。そう思いつき手に取るうとしていた鍵を再度探るが、そこに感触が無かった。焦った。先ほど避けた時に手放してしまっただけ。辺りを見渡すと、噴水の近くに落ちていた。遠くは無いが、狙われているところを考慮すると、遠く感じてしまう。

「次は……外さない……」

男の腕が炎を纏う。それがルーシィに向けている事はわかっていいる。避けようと思いつき、立ち上がるうとしたが、突如として足に激痛が走る。

確認する必要がある。どうやら捻っただけ。万事休すと言う事に、思わず唇をかむ。

(アタシは……こんな所で……)

ルーシィの脳裏に様々な事が巡ってくる。そして何も出来ない事に、涙が流れた。誰かの助けを呼びたい。だが自分を助けてくれる人など思い当たらない。

炎が迫ってくるのを感じながら、ルーシィは静かに目を閉じた。その時である。

この場所へ突撃してくる、乗り物のような轟音が鳴り響いたのは。

「間一髪って所か？」

「ツカサ……？」

「無事だったな」

バイクを飛ばして中へと突入し、金髪の少女を救出できたのは本当にギリギリだった。本番一発、片腕で持ち上げ脇に抱えている。見た所の外傷は見当たらない。

彼女が涙を流しながら、嬉しそうな表情をしているのを見てツカサは彼女を落とした。

「きゃっ!? ちょっと!」

落としたのが彼女の頬に障ったのか何かを言っているが、ツカサは構わず地震の前に立っている男に視線を向けながらバイクを降りた。

「……お前か? 一体誰がお前を雇った?」

「私はあの方の部下……邪魔をするなら、排除する」

「やれるならやってみる」

ツカサの挑発が合図となり、炎の塊が襲いかかるのを転がって避ける。それと同時に、ツカサは先ほど手にしていた白いバツクルを腹部に装着していた。

「次ぎはこっちの番だな?」

装着と同時に出現した白い本型の“ライドブツカー”より、一枚のカードを抜き出した。それには緑の複眼を持った仮面の戦士が描かれており、<DECAD E>と記述されていた。

「変身!」

強く叫ぶと、カードをバツクル“デイケイドライバー”に装填しバツクルを挟むようにしているサイドレバーを中心に押し込んだ。

< K A M E N   R I D E >

< D E C A D E >

電子音が鳴ると、ツカサを中心に10体の影が出現して彼に集まると、その影と同じボディーツを纏う。そして頭部に数本のラインが入ると、その体をマゼンダ色へと染め緑の複眼が光る。

これが、ツカサが変身した姿　「仮面ライダーディケイド」である。

「ディケイド……?」

金髪の少女が驚いたような顔を見せた。どうやら、“知らなかった”らしい。

「成る程……貴様が、悪魔か……」

「だったら何だ?」

「相手に不足は無い……フンっ!」

不敵に笑った男は、その体を発光させた。すると、徐々にその形状を変えていく。その大きさは優に人を越えており、ツカサも少女も見上げる形になる。

「ディクオーバー  
全身接收か」

光が治まると、現れたのが火を纏う鳥だった。この火災が起きた原因が、ただの炎使いと言う事ではないらしい。だが、この巨大さのお陰でディケイドは本気を出せると思った。

「手加減はいらないな！」

ライドブツカーを手に銃型に持つと、それを巨鳥へと放った。

しかし、当然飛来する相手はそれを簡単に交わし、デイケイドの方へと向ってくる。だがこちらには金髪の少女が居る事を思い出す。デイケイドだけなら避けれるだろうが、少女はどう考えても無理だ。

「これで行くか」

その状況を打破するために、ライドブツカーからカードを引き抜いて、それをまたバツクルへと装填する。

< KAMEN RIDER >

< HIBIKI >

すると、デイケイドを炎が包み鬼のような戦士 仮面ライダー  
イケイド・響鬼 に変身する。

「姿が変わった!?!」

「ちよつと伏せてる!」

< ATTACK RIDER >

< ONGEKIBOU REKKA >

変身と同時にカードを装填し、その手に「音撃棒・烈火」を装備する。そしてそれが炎を纏うと、デイケイドは巨鳥へ向って放った。それが衝突すると、呻き声を上げて降下場所が変わっていく。巨鳥は燃えている場所へと落ちると、その姿がさらに大きくしている。

「ちっ……更に巨大化しやがるか……」

「アタシに任せて!」

「あ?」

声が出た方に振り向くと、ふらふらと歩きながら噴水へと近づいている少女があった。その時デイケイドは彼女が負傷しているのを感じ、止めようと思ったのだが、「任せて」と言う彼女の言葉を優先させようと思い、その体を支えた。

「え?」

「どうする気だ? 何とか出来るんだろ?」

「うん。アタシの星霊が絶対!」

噴水まで連れていくと、少女は落ちている鍵を拾って水辺に鍵をつき指した。

「開け! 宝瓶宮の扉、アクエリアス!」

少女の言葉に、水が光を放ちその姿を現す。体半分が魚の姿を持った美女、いわゆる人魚姫と呼べるであろう星霊が佇んでいた。

「アクエリアス! この炎をかき消して!」

「は? なんだと、テメエ?」

「いいから早くしなさいよ!」

「おい……早くしろ、アクエリアス」

「ん? ……ちっ」

契約者と星霊がいざこざを起こすのに介入すると、空気を呼んだのかアクエリアスが折れた。だが、その目は金髪の少女を睨みつけ



ている。

「仕方ない、手短に言う……鍵を落とすなあっ！」

「ちよっ……ちよっとーっ！」

アクエリアスが水を放つ瞬間に、デイケイドは巻き添えを察知し上空へと飛び上がった。そしてそれは的中し、火を確実に消しているがそれによる二次災害がホテルだけ出なく街にまで広がっている。しかし、デイケイドはそんな事よりも真っ直ぐに敵だけを見つめていた。アクエリアスにより炎の力が弱まり弱体化している巨鳥。デイケイドは響鬼の変身を解き、降下しながら一枚のカードを装填する。

<FINAL ATTACK RIDE>

<DE DE DE DECADE>

デイケイドと巨鳥の間にカード型のエネルギー体が出現する。それにキックを放つ体制を作りながら通過していき、その距離を急速に縮めていく。そしてその足先にエネルギーが収束していく。

「はあーっ!!！」

「アアアアアアっ!?!」

デイケイドの必殺技“デイメンションキック”が炸裂する。頭部を狙った蹴りは見事に的中し、巨鳥を吹き飛ばした。吹き飛ばした先に土煙が起こり、しばらくして治まると赤髪の男が気絶して倒れていた。

それを確認すると、デイケイドは変身を解除し元の姿に戻る。直ぐに踵を返し駆け出して外へ出ると、木にもたれかかっている少女

を見つけた。

「ツカサ！」

「無事だったか。全く、契約者を巻き込む星霊と契約って、お前バカだろ」

「仕方ないじゃない！ 横道十二門の鍵なんだから！」

「貴重さより、命を取れ。お前、足怪我してるだろ」

先ほど気づいていた事を指摘すると、少女は足を隠すように手を当てた。ツカサは嘆息し、少女を抱きかかえてバイクへと向う。

「ちょっと、何を……」

「……送ってやる。ほっといたら夢見が悪いからな」

「……ありがとう」

少女の言葉を聞くと、ツカサは疲れたように息をついた。だが、その表情は少し安堵した様子であった。

7

2人がバイクで街の方まで降りると、彼等を待ち構えるように騎士甲冑を纏った軍が待ち構えていた。先に進めないと判断したツカサはバイクを止めてゴーグルを外してヘルメットを取った。

「何の用だ？」

「貴様がデイケイドか？」

「それがどうした？」

「魔法評議員、ウルティア様より命令を受けている！ 即刻、この街から去れ！ さもなくば拘束する！」

「えー！？ どう言う事！」

つまり、ツカサ達を困んだのは魔法評議員の軍隊である。しかし、ルーシイには事情が把握する事が出来ない。彼女からの視点では、ツカサに勧告が出されるとは思えなかった。火災については別の犯人がいるし、ツカサはそれを倒したのだ。

「この騒ぎは貴様が元凶だと聞いている。世界の破壊者、ディケイド！ もう一度言う！ この街から去れ！ 悪魔よ！」

軍の隊長であろう、その人がツカサに叫ぶ。

すると、騒ぎを聞きつけた街中の人々がツカサをおびえた様子で見ている。そして、小さな声で「悪魔」「破壊者」等の言葉が聞こえる。それが全てツカサに対するものとルーシイは直ぐに分かった。

「ちよつと、それって……」

「よせ！」

「……ツカサ？」

堪えきれなくなったルーシイは乗り出して言い返そうとするが、ツカサがそれを遮った。言ってからツカサはルーシイをバイクから下ろすと、軍隊の方へルーシイを指差して向いた。

「こいつは怪我をしてる。手当てをして欲しい……じゃあな」

「ツカサ!？」

ルーシイが呼び止めるが、彼は振り向かずにバイクへと乗る。未だに民衆から恐怖の目で見られながらも、何事も無かったように走り去っていく。

「悪魔……破壊者……ディケイド？ あっ!？」

ここまで聞いた見知らぬ単語を並べると、ルーシイは思い出した。あまりにも自分とはかけ離れている事だと思っていたので気に留めていなかったせいだろう。ここ数年世間を騒がせている存在。魔法評議院により警告された人物。  
それが……。

「ツカサ……なの？」

信じられなかった。今日初めて知り合ったと言つのに助けに来てくれた青年が、世界に否定されているなんて……

ここは俺の世界じゃない……

そういう事なのか？

では、彼の世界とは何だ？

ルーシイはわからない。ツカサの抱えている想いが、世界が彼を否定する理由が。それがいたたまれなく、心に深く突き刺さった。

8

翌日、変わらずツカサはカメラのシャッターを切る。

もうここに居られなくなった街を、最後の記念として撮っているのだ。これは既に、恒例として行なっている事である。

「見つけた！」

「ん？」

カメラのダイヤルを回しながら顔を上げると、走ってきたのか息を切らしている金髪の少女が立っていた。

「言つただろ、俺に関わるなっ……」  
「そんなの、アタシには関係ない！」  
「俺は破壊者だ。それは事実だ」  
「だから！ アタシはそうは思わないわ。だったら、どうして助けてくれたの？」  
「……………」

思わぬ彼女の問いに、ツカサは言葉を詰まらせる。それはツカサ自身もわからない事だからだ。ただそれが、“やらなければならぬ事”だったからだろう。だが、明確な答えがわからない以上、答えるわけには行かない。なぜかそう思う。

「記憶が無いんだよね？ ツカサは……………」  
「お前っ……………どうしてそれを？」  
「魔法ショップの店長さんが言ってた。だから、ツカサは街を転々としてるって……………」

少女の答えにツカサは更に疑問が増えた。確かに、彼女には街を転々としていると言ったが、“記憶がない”とは言つた事ない。

(どういふ事だ……………っ、まさか……………)

昨日出会つた闇ギルドの連中や変身魔法の男……………それを裏で操つていた存在が“あの女”であるのならそれが可能である。既に2年半経つていると言うのに、未だに狙われているという事だ。

「大体わかつた……………」  
「？」

いきなり言葉を漏らしたせいだろう、少女は首をかしげた。その表情をツカサは反射的にシャッターを切る。そして手馴れた動作で魔水晶を取り出して操作し、写真を現像する。

「うわあ、これいい！」

「は？」

それを覗きこんだ少女は、嬉しそうな表情で写真を手に取った。そしてそのままの表情でツカサへと向いた。

「アタシ、ルーシィ・ハートフィリア！ よろしくね、ツカサ！」

ルーシィと名乗った少女は、写真を持ったままツカサのバイクに乗った。

「おい！ どう言うつもりだ？」

「いいじゃない。交通費ぐらい節約したいの。行くんでしょ？ 次の街？」

思わず溜息をつく。

知っていたのかどうかは知らないが、いささか強引過ぎて逆に呆れてしまう。しかし、ツカサも思わず微かに笑みが浮かぶ。

「行くぞ」

「うん！」

ツカサの言葉にルーシィが肩を掴みながら答える。それを合図にバイクを走らせた。

肩を掴むルーシィの手には先ほどの写真が握られていた。首をかしげたルーシィを中心に、様々な表情の彼女が写っていた。それが

まるで、彼女の全てを写したかのように。

9

火災で壊れたホテルの前に、鳴滝は立っていた。その表情は何かを憎むかのように歪んでいた。

「……この世界は確実に滅んでいく……」

鳴滝は呟くと、彼の前に時計のような物が出現する。

それは日付と秒針でカウントされており、ゆっくりと刻んでいた。

「私は許さない……ディケイド……」

するとまた暗色の壁が出現し鳴滝を消し去った。

全てが始まる時まで、あと半年。そう、“妖精の尻尾”との出会いまで……

(後書き)

本作品をお読みいただき、ありがとうございました。

仮面ライダーディケイドとフェアリーテイルにハマってしまい、なんとか作品を作れないものかと考えた結果、このような作品になりました。

連載予定の作品ですので、設定は後日公開しようと思っているのですが、主人公である、ツカサについては、不明な点が多いと思われるのでご説明します。

名前：ツカサ

年齢：不明（推定24歳）

魔法：なし

魔法資質を持っていないが、ディケイドドライバーを用いて、「仮面ライダーディケイド」に変身ができる。

容姿は原典と同様の「門矢士」。記憶を失っているところも同じであるが、門矢士が全ての仮面ライダーを破壊し復活させたことにより、こちらのツカサは9人のライダーに変身する力を得ている。しかし、この世界にはライダーが存在しないためFFRのライダーカードは所持していない。

ほかに、ディケイドであるというのに他のライダーの存在を知らない。なぜ自分がディケイドに変身するのかもわかっていない。

バイクは、これも原典同様「マシンディケイド」。



フェアリーテイルの世界に合わせてなのか、動力はガソリン魔水晶（交換型）を必要とする。ディケイドに変身後は、原典同様である。

以上が、大まかでありませんが主人公の設定です。

その他質問がございましたら、お寄せください。

本日はお読みいただき、誠にありがとうございました。

### PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2068n/>

---

FAIRY TAIL - ANOTHER STORY DECADE -

2010年10月15日17時45分発行